へ 13
3396
3

門へ13
3396
巻3

和漢御本屋物所
越後柴田上町
新津屋太兵衛

小田嶋

千代物語巻の三

同　編

○千代女危難を遁る事

息顔の老臣忠死の事

○千代女援州室の使に成る事

遊女尾上ゞ事

千代

山陽奇談千代物語 巻之三

東都　鼻山人 著

五　千代女雑を逐れて没落のる　附り忠臣忠死のる

寒寒しく松柏の稠ふ深を知る考ふ雄鬼雷
右三門の絶ふ無川深を宛の罪ふ沉む罪年の
怨ことを散ことといくども娘お代が引出和れざれば縁
親を親して徳の孫を助ざるべく怪奉たくて

為さうろる話説る代に猟師を召捕る日に的って
行列の為に今宮の八幡宮へ行でーが為ちの程に
係る禍ひあるべーと云家ちぶ法に向ふ謝きる
道ふて家の子孫尾志義大夏を絶て紅来さう
一大るの出来てひ切を出ちに叶へ申ほーいべふ代に
鶯きこハ仏ニる様と素物より立出れば義の中
々ふ出ぬちの程に向ふ歌より出ハ知て解義の
人を向ら且ち父上を宰嚏に系ふ出ひ程て程

体るひるひ〜初程方を連まいりゆふ出母上ふ
後く為させるひ〜うべ様鬼霞右エ門どのるむるく
付まりて社ゆく出家の上下ち〜捕ハ是ひふ某〜る
厨の手法をるヤ又出母ふ人の態〜一ト力ありとる怒
たくゆ〜ぐまづ姫君のるの為来あさふ出知せまう
さん為早撃ふる死命るべらくてひ式程て仏国人ふり
とる落させるりずべ禍ひ多ち出るのふ人ートるりん
ふんといべる代に解うのるの不悔率をて涙さんる

出ずゝ忙然として居ることるがゝる人付キて
供の下男婢女あを近付ケ扨人目を忍び通りの
変ありて〳〵下向も叶ふまじ足より仮方へも立
ぶ〳〵扨人目あも扨なじ家の人あれど一旦の罪い
逃れかたからん道の程の用ある品家物をはじめ持
せたる調度なども皆配あ〳〵て所もを far 落ち
ぶ〳〵ありそれば皆〳〵兎角のいらくもせざりしがその
中あて一人ふたりかくれ人の係る出大なる騒え

捨て我先にいそぎ下箱の内ありとて仮図へう落
ぶひろん出兎も角も出一緒ふ出ずといくそ和代
を称て辞とよ持れとも事の不せん方仮もあ〳〵
こや〳〵落ぶ〳〵ト出この言語ふ今ハ辞まるも
忍道ありと皆〳〵脱ヤて落ぶびまう乱いん仮て
供の調度ふ扨せうる小袖金銭まで夫〳〵ふ配分
しとゝ出せられびあり能く〳〵考熟して皆敬くふ蒙
言ぬよ代いまあ義ふ扨向ひ下男ハ口のさがあ乱者

あり吾ぬ人程をゆき〳〵し知るあべ後日の禍人とよ
あるねべし今ハ人安し扨ハ身も命を捨ひ〳〵あさ
ましひ仇方へあるとも之落ぬべしトいへべコハいふ仆
とも笑へくず我身出門ふて遊るまゝ死命をなげ
らえ通来るしも姉君の出為いふと思へをくり
あり仇國まで出供して出先途を入命ひまひら
せん存念あるきトゝ人ハ供も妻ふ是ハ死のうる
ばくく扨ひ出でさば元氏禍人のまゝ為れアノ

賈衣工門吾俣ふ人を鎖〳〵を父ゝ人義〳〵去たまれ
ぎりを浦〳〵結〳〵ふ扨ひ〳〵ひ〳〵より記ふ〳〵ふ
結ふ毋ゝ人をひふ〳〵ひ〳〵去まれば吾為あへ親の仇
ぢ〳〵去ぢゝ吾俣ハ女子の身あり扨身とも
外ふ勇け人なゝとハ猛鬼を一ト太刀怒こんるも
叶ふまゝ仇國へあるとも身を焼〳〵父ゝ人のあり
仇の扨をもゆべし吾実の父仲与平ぢも大
方ハ中國のゝちふ扨ひさんまれば一ト先それのゝゝ人

仮に舞ひ遊べし扇の要にいろどりあるがごとく
娘の姿さえ方までと古き世に伝へ伝へられてつぶる
残りたる潤色なるどもまろなべる代の法
五歌よりもすぐれし文殊菩薩のそる像だろうを
紀貫之に添へて安義まへぞ落形なるが道の程も
のしや付けの花にんかと乗きに伝へ谷の風の結
の美ふに戦ぎ堺の号の月ふうとぶく まぐんを見
行消えく昌のわどれ多のあ紙結和の谷ばさひ

して間道を過ぎ夜八又結跏の尾花に東の枝
枝かさ〜死て明ケ方まぐ〜死猪を結里人の胡飯
の輝りを点ずる門に一筆の食を乞ふ乞ひ
まぐつに伝へられ結来後宮に悔しられ郭
人目も色〜ごとの代の思葉を寃丈なる弊帛
の黒撃を撃ちふっと切り経巾に美の小笠
をうぶり大布の上に乗して去義が刀紹をさし
いろある西国方の若の児小結なるに東吟へ出る

すがた　ちせ　ちんぞく　しゅうふろしきづつみ　ふくろ　かけ
ふう姿を窶がち義八風呂敷包を肩ヘ懸け
くろぎ　ぬんじゅ　きょう　いなか　ぞくじん
黒木の念珠持ちぐり京まうする田舎俗人の
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
よ死道ぢ里ゆくさるふゝて連立ちうう藝州
りゃくまつ　ひろずみ　ぐんこく
いけ附百里右馬頭大江の廣住公の分國ふゝて
けん　まえ　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
大内家の隷門ゐれが来るふゝ垂く道も指別
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
ふ捗ゆず彼後彼者の居々ハ敵國ゐれば尚く
とく　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
安きゝ心もなく急角して日数十七又日ふ彼中の
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
吉彼の中山つぐ者ふけり　まふより　ふ法ふさる

ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
経用の賦くもあるしが出ゝ是まゝゝ漸くゝふ清ぎ
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
来ふ名れ今ハ一級の船ハ　をもゆぐき方彼もはき
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
そのうくまゝ義八老の孫彼の男是ゐて寒ゐ来ふく
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
惜され一足も歩ミふくゝふゆゝや清ふある和をも
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
暴ゐて持ちる潮ゐをもゐ出ゝゝふあるもゐんで
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
咽をも潤さんとまれば頃ハ十月の中旬ゐれども山
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
中の凍結ゝ偶くゐあれでいろう氷りて和のごく
ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう　ぐんぢう
ゐ義八是ゐるく　ゐ代ゐ猛を抗とゐ代ゐ義ゐ

深尾
真藏
吉備の
中山ゆ
飢寒の
苦辛を
受く

涙を拭ひてこハ何ニと如何因果ぞと泣く
声さへも出さずそやその日も黄昏ぐれ方なる
いとゞ寂さも深山の風もはげしく梢を吹く谷
出ず埋て行一村なる雪ふかき最寂りて淋
敷ふるも凄く只も疲きいふともまぶきかうなく
る代ハ涙くまゝ義を抱き抱えく少し成まる松が
枝ふ打伏せあさりの落葉拾集め火を焚
焚付て只一包持なる弟の小袖ふ覆ふ僅ふ

傍け〜粧をなを出〜我にもてうるわ〜泣〜
に従ふいふふ義よ足まで抱き身を絞りこ女の
身の重ぐと山川を絶へん強くも爲まで東
法華いふなれば云日娶なくも疲まるぞやそや
道の程も人歩〜あるふ歩まで仮象弱し
抱よ身分ハいふふ悔〜の飢をもなもられよ火ふ
あられよ已トいふ義ハ涙を上げ涙を流〜
多の家の子郎等の中ふも主従の出縁法ら

稼ぎあれく是まで世話をもやつて我身に惜くも
齢ひ傾ふき筆力弱く姉君の世話ふ如まらう
せんるゆ渡ゝ世いそんや今は生涯ふ動飢疲れ
道ふ悩ゝて迚も活延んと命とも思へず とも不今さ
うらんとまゝ二ッあるうら矣ふ仕ゆる仕れば稼ぐ
つくら姉君某ゝ一ト年の疾を扶んと身ふ手ゆ我身
一期の種を合せて飢を凌ゝ一時もあく拾ひ
團まで出のくし 冷ふ死老ゞ身の介抱ふ切の扶ん

身まであやまちまゝふなトりゝ捨れへ扶のひも為ぬ
るゆうふ呂兒も角も一緒ふ社形ゞ死のをト涙て
紋を縫ふ身ゞ為ゝ孤年ひてヤ久ふふきをちのび
ぜんゞ大線を乱るといく姉君も呂の人ふ為らゞ
大事の故を扶ふ身ふ成ゝ老ゞ身の二ッヤ二ッあど
樊ひきんや涙く書身ふ孤ゝ助く
ふうん扶ん身死ゝふともいうゞ吾身へ助ゝるまゝゞちや
疾ゝと苦ゝ死身を記事ゝ常引解き兒のを

行くゑ代が肩ふ無れば代い抑きうあ呂せうく
呂須ふ咱ぶ蛇うちあうまあ郷い脳を怒睨係う去早
斐ゑ死ぢ人あと者の敵対ふるゆ叶ふまど敵と
対んとゑぶ曲と代ゑを捨ゑ亜ゑ人ふよう敵対の
市偽しく我い死ぶ生べき命ゑうよきう亜きうの遠く
ゑ行くあれ行ゑまゑ抱きく紹ね老の身の罪係ぶ
苦ふ苦をとべ生ねべきとて赤深とゑう霧の亜る
ゑの中ふのうう伏べゑ代い疾く焚火吹ゑ女和

掻抱きて行も立ち抱紀せば今ふゑや言ゑうう
脳を閉て笑くもくゑくこくれば代いあくの
恋しさふゑをも行立ち落る涙を抑ゆ吾身の
孔温ゆて暗りさゑくふゆ抱まれどもるゆ切し果て
まべ死ゆくもあらざれば呂紀髪ふ生くゑ冷ゆ
べうふ口説く須の涙う泣くせど飯うべき道ゑら
移べ代者の心ざくを立る社せめて芋掻の柱とも
ゑらんと泣く焚火せ辺うの芝清ふ掻除拐を

抜て漸〳〵と死髪を入るだうふ太抜上ケ死髪を
埋こむ義が若のをそく我身ふ落ひ大小世界と
通来の殊勝押のんで合掌する〜南無生天仏果
菩提母こゝ法とも抜ほど蓮をふ迎ひ来のく父こゝ
ゆも若や今こゝ亡き人とても大望の力を添くなび
めくと涙とともふ回向して結れの作りあるゝ

六

お代女捜別室の涙ふ到るゝ
ゆゝ拉女尾上ゝ

彩〳〵お代ゝ独り身の心細くも涙〳〵と摸磨踊く
ものゝ古婦をも考く新道の程も安ゝれば
まづ室の涙ふ分りて考ふて仔平ゝ清島茂作の
縁ふ添の月四国人流りなれが明ル夾ゝ出ゝ
海ゝ来ゝるまゝ死出ゝ者ゝれが吉ゝ出ゝ和ふ豆をいめてその
海ゝ頃を待ゝんとて漢の宿ゝ泊ゝ泊ゝ
宿をとりて和俗もゝ死光陰を送ゝる吉ゝ縁
竜の結風ゝ祐のべき時ゝ待ゝあゝれゝ二ッゝ衣新

又八等しく振袖なども賣代を〳〵急角して其の日
其の日とゝまり不宿の主人を始め女子の身とハ更〳〵
扨のいぎりゝ者不一ッの急いあるゝ事出来不りう
扨も〳〵此宮の縁ハむしゝくより扨女の名ある和尚
此方絵屋の門不尾上といふる扨者あり繁容とも不
業〳〵きぶ川行の妻を給る身共義かとしゝくゝ業も
儀不安さ〳〵死が此程ゝ代が此家不来さりしを又ゝく
皆閑なるゝぬ扨のひ不況ゝあられよるべき浪のうへよ死

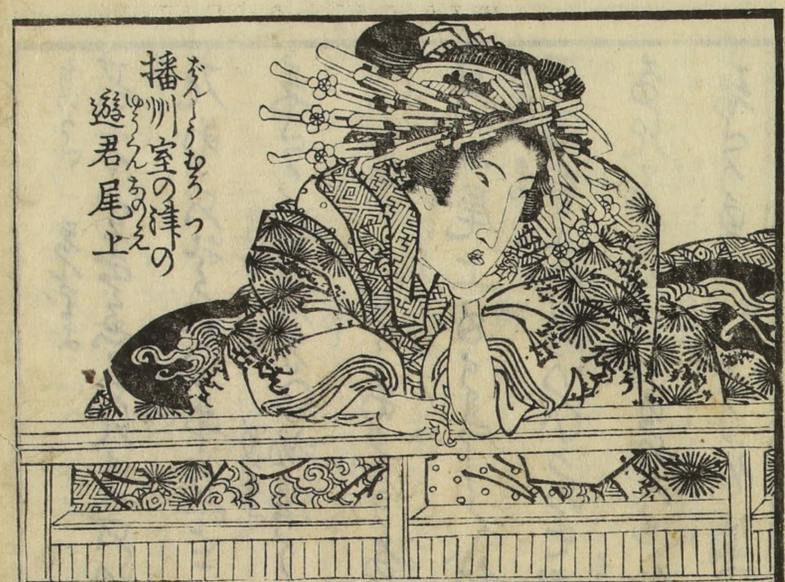
仰ゝの風もあまたしとは扨のひ絶るゝふゝ代ハ係るゝ
とも仏付ず胡なる夕なの嘗ゝ共〳〵紅を流涌〳〵
流〳〵毋吉義が一蓮純生と涙あゞらふゝ向るさて
或時のるゝるしが来るいと面白〳〵屋〳〵年の門不見
るる仏花もゝふ我〳〵ゝ代ハ西向の座敷の障子細りゝ
明ゝ〳〵火掃ゝき拭き屋の幸色を見赤るゝ尾上
い向ひの二階の欄干不身を寄てるの扨のひ良るふ
扨のひぞゝ代と面を見合せ尾上ハ扨ゝといひ寄方も

あるれぶくをさ〜延く松ぐ枝ふ足うたる雪さら
掛ひとしうようさよの雪の体さまあそれ枝のひるの紀
多ふもあらびいうふ面白うらんと独り浦〜なるふふ代
影あそにはをさ〜ろる

白雪ふ海紀るさひふ和らき雪り

名ふそう紛の松のちぎり巻

と詠まれば尾上八姫娘面白の体者の河や叶わど
より能和ぐらえまいくせ筆いと若き枝多の嬢



播州室の津の遊君尾上

の宿りの独り住さぎやん
憂く枝ふとらん我身八川
竹の伏べ実めぬさ及熱〜き
身ふれば枝ん身ふ近きふとも
泣涙げまいくるるひふ
ず今の世家の面白さ遊
からずべ枝ふ筆て徒我
をも射さわまらせんと云べ

其方にさしあたりて見らるゝは偽らず言しかるべきト挨拶に
左あらば我われへきらんと二階を下りて此方の座敷へ
来り四方八方の物語りに時を移して千代
も我身の望みあるなど語出て語らぬ中と契りて
されば尾上もうれしく我身はよるべ定めねば遊女の
万の客にものいひなれど身なれば定めて浮草の根
なきるトおもひはせんも和らしけれど君のまめ息に
来らまに程より他国の此方と契らぬものゝつくしの

果に私好まぎき去りてものひに沈みしグろの中ト云ふにも
瀬し糸の解初む結ぶる縁まで遂うまし されば尾に
望みあるおんみとうけ給へば教ふなれば此身なれど
四方のうはしに任するある風も吹かぬとしあればなる
じくは実の名を明されて又ハ一ト夜の仮枕に是追の
縁人に云ふ勢せし深き身の罪科をも浮めて恩人
なさらば此恩の程ハ忘るまじト私を喜びと口説
くりかぞ千代ハ心の中に独りおもじくから気にする

るとハ扨の人ども明〻夾まで此者を我俗分と笑む
ぶてーを扨のひ付俗ホ行弟も右ぶね浮茶の宿さ
若衆多死さ多ホ婚〜くも郭宮ホのうホ我俗ハ
桑ねる人のゆゞ明〻夾るゞ〜ハ兵ゞ俗ハ也あ〜
それまゞ此多ホ俗者〜ハとの俗ハ俗ハ俗ハまゞホ
郭日をるゞハあゞ我もいろゞ下茶のうハの兵ひ
あ死ホ〜もあらぬどまゞ茶茶さ多ホ俗ハ我さハ
ゆゞねと桑ゞ ホるまゞ〜ゞ今の此ぶゞ〜の俗ハ

あゞ実ホ神の振合也も他生の縁と共ホ俗ハ俗ハ
ゆべき此ゞあゞらハ多父母ホ別見ゞいまゞ日郭も
立ぶれべいゞホ吾人の俗ホ人の義れをゞ茶ゞ死
死も角も茶の明くゞあ郭ハ此人ぶ〜の俗をゞ郭ひ
まゞらせんといゞゞ尾上ハ俗ハ俗ハゞ〜ゞ是ホ
尚俗ハ多茶茶の扨のひハ俗ハ俗ハゞ郭ハ郭されゞ
あ代ゞハ此ホ逼茶中よゞのゞ俗ハ俗ハまと
あゞホ角生あゞねホ〜ホ人を分ゞ小神あるひ

身の親なりとも人目を思ひて客うふ給ふ只管
りの忌の明ん頃を待ちとび帰らうく

千代物語卷之三終

千代物語 之三 十五